

史料編纂所所蔵影写本『天文十四年日記』

村井祐樹

史料編纂所所蔵影写本『天文十四年日記』（請求番号／三〇七三・一

二三）は従二位神祇大副吉田兼右（一五一九～一五七三）の日記である。

兼右には、本紀要一八号・二二号で翻刻紹介した『兼右卿記』（影写本全五冊、第五冊は巖島参詣記で『広島県史 資料編古代中世Ⅰ』に翻刻あり、以下『兼右』と記す）がある。兼右については、紀要一八号を参照されたい。

本所における影写は明治四十四年に行われており（所蔵者は吉田良正）、『兼右』より先に借り出されていた（『兼右』の影写は昭和十三年）。原本の所在は不明で、『兼右』や『兼見卿記』と同じく、戦災で焼失したものと考えられる。

本記は、日本書紀講義関係の記事を抄出した別記という位置づけが成されていたようであるが、記述内容はそれのみにとどまらず、天文十四年六月～十五年二月まで、兼右周辺の様々な出来事が記録されており、『兼右』とそれ程の違いはなく、史料価値は高い。紙数は、表紙を除いて墨付き一六丁。

〔釈文〕

凡例

一、漢字の字体は原文通りにしたが、変体仮名は現行の仮名に、異体字

は通用字体に改めた。

- 一、字送りは原則として追い込みとしたが、原体を遺した部分もある。
- 一、丁の表裏の末尾ごとに丁数を示した↓例（1オ）（1ウ）
- 一、文中に適宜読点・並列点を施した。その他は通例に従った。

〔表紙〕

於禁裏日本書紀御講之事八月從三日
被始之、

天文十四年自六月至十二月

〔内容〕

天文十四年六月〔至十二月〕

六月廿一日、

壬子、晴、八專、四十余日大旱、草木多枯槁、自（秋葉）武家以三瀨弥四郎有召、即参候、直垂、以宮内卿局被仰出云、若公此（足利義輝）十四日御不例、於御鎮守社被取御鬮、其趣者、為御祈可有御湯立乎、又以吉田可有。祈念哉、兩様御鬮内、祈念之段、当御鬮、於御鎮守可致立願之旨、被仰出了、畏存之旨、申入了、即於御鎮守御祓可修行之旨、立願了、有御平癒者、即可被進御太刀・御馬之旨、被仰出了、

向兼考廣橋亭、垂相對面、予申云、從防州築山社俗別當・禰宜・祝三職、

去年申補其人、然二(1才)永定置彼三職度候、官符 宣申請度之由、

從大貳方申上候、可有如何哉、垂相云、從其方可給一通候、可申沙汰

候、御取沙汰之上、不可有別義之由、被申了、予云、近年無所見、旧

年可有之歟、可引勘之旨、演說了、垂相云、春日社官身西、人躰大藏卿

申之、八省卿有上下、如此事不可然之旨、被語了、

出羽国利賀薩州当年四十才 息十五才 祈念之儀申之間、心得之旨領掌了、

廿二日、癸丑、晴、 広垂遣狀了、

防州築山社俗別當・禰宜・祝職事、去年申入候了、然二此三職永定

置度候條、官符宣事、申請度之旨、從大貳方申上候、先例(1ウ)

連綿御事候條、預御申沙汰候者、可畏存候、兼右恐惶謹言、

六月廿一日 兼右

廣橋殿

又、三代実録借用之間、自一 至十五借遣了、

廿三日、甲寅、大陰、從昨夕雨下、去十九日一通到來、諸家祈念之驗歟、

祈雨事、一七ヶ日殊可抽精誠之由、可仰下候、宿紙払底候間、内々

令啓候也、恐々謹言、

六月十九日

吉田侍從殿

當時且以不進宿紙云々、依之諸寺社皆此分也、

從泉堺北庄神明町、神明令造替鎮札二所望之間、領掌了、為礼貳續到

來、從清水本願申來云々、

廿七日、己未、晴、土御門三位有春來、談云、來晦日菅貫祓進上 武家

云、就其御台御方為御重服、可有如何乎、先年有春重服之時者、不

誦祓已下、而於輸入之了、如何、予云、旧記引勘可申旨、返答了、彼

云、閏月之時者、用閏月了、為其分歟、中々其分礎所見在之旨、返

答了、又云、鹿食人不入菅貫輪之旨、有其沙汰、如何、是又為其分之旨、演說了、

江州高鳴郷若宮八幡有御崇、鎮札所望之間、遣之了、為礼一貫二百文

到來了、

廿九日、庚申、晴、遣有春卿于書狀了、

昨日參会本望候、仍重服之時、御台樣可被越菅貫輪申否事、応永九

年六月廿九日記云、六月祓、重服之輩不可然候、輕服之人者、暇已

後無憚之旨、応永九年旧記所見候、此上者、以御代官可有御用哉、

御分別專一候也、

廿九日

土御門殿

為後勘注之、

応永九年六月廿九日六月祓、重服之輩不及沙汰、輕服之輩為暇已後之、

可無憚也、

康广元年六月廿九日、丙寅、晴、六月祓家中悉沙汰之、尊母御輕服

至明日、也、然而被致沙汰之先規也、重服人可為何樣哉之由、有人々問、

不可叶之由返答之、先規也、但万里少路大納言重服今月二日之間、限

今日為清淨殊可宜之由、家君被相計、可沙汰之云々、

明德三年六月卅日、穢中六月祓先例不憚也、輕服暇已後致沙汰條、不

憚之、暇中者憚之、

故兼員宿禰六月他界、翌年兼前宿禰并前大副入道以下兄弟等、悉致沙

汰之、同母儀兼員沙汰之、

御折紙披見申候、一段畏存候、仍六月之輪事、尤心得存候、御祓不

及御祓誦誦、御輪計二入給事、其例多々樣候、何も可得 上意候、

御懇之儀、尤祝着候、御代官事、尤候、何も重而可申述候也、

乃刻

有春

吉田殿御報

(4才)

七月

一日、壬戌、晴、神事如常、

至高嶋鎮札調遣之、以当社社人可納之旨、懇望之条、下鈴鹿神右衛門尉了、

十三日、如例、禁裏御燈爐進上了、

廿二日、武家若公去月御立願、可有報賽之由被仰出之間、明日吉日之由申

入候処、有春卿被成御尋之処、同事言上云々、仍明日可修行仕之旨申入了、為御祈禱料五百疋到来了、

神供方五十疋、清祓料十疋下行鈴鹿若狹了、

廿三日、甲申、晴、早旦參武家、先行事一座、(4ウ)次清祓、次供神膳、

此砌(足利義勝)大樹御參詣云々、次退下、而參殿中御祓并太麻進上了、

神道神力神通御表玉串御祓

神変

御対面云々、此後被召與御殿、以宮内卿局被仰出云、今度若公即時御不例御驗云々、神妙思食者也、若公御服御難被下之云々、忝由申入、退

出了、

午刻、自紀州根来寺ヒタチノ社仮殿遷宮・正遷宮・上葺日次事、申来之間、調遣了、為礼百疋到来、
(5ウ)

仮殿遷宮吉時

八月九日己亥 時戌

八月十一日辛丑 時戌

上葺吉時 造宮

八月廿二日壬子十七丁未 時卯

八月廿二日壬子 時卯

正遷宮吉時

十一月十日己巳 時戌

十一月廿一日庚辰 時酉

天文十四年七月廿三日 神部(花押) 奉

神道管領長上下部朝臣(花押)

日次事承候、勘進候、此兩日内可被任御所望候、先年日時勘進候、

同社候歟、於兩遷宮者、神(5ウ)道深秘之儀候、率爾被遂行候者、神慮如何候哉、將又貴寺一見之望候、以事次風度可令下向所存候間、

其時節可憑存候、

七月廿三日

根来寺本願上人御房

從広橋重相兼秀書状到来、

日本記講釈事、来月始必可被參候由候、次自防州申候宣下之事、無

相違候様、官宣(清原)枝賢名代官可相調候哉、其分候者、可宣下候、尚々講釈事、御請分可申入候哉、期(6才)報候、謹言、

七月廿三日

兼秀

心得旨返答了、次防州之事ハ、築山社々職・別当・禰亘・祝等、永補彼社度之旨、大内三位去年懇望之、当年以書状可申沙汰候旨、申来候

間、就広重相令奏聞之処、勅許也、官宣者伊治留守中、為彼代大外記枝賢調之間、与彼仁可申談之由申来了、

山科黄門来、今夜逗留也、

廿四日、今宮社祭祀也、為神供料昨日・今日兩度分四十文・八木六升下行了、

廿六日、向^(公枝)三條西殿、称名院右府^(同)仍^(仍)寬^(仍)對面、持參二荷三種了、來月日本

紀講被仰出了、於御前進退作法(6ウ)可受御指南之旨申入了、

參青蓮院門跡、竹內門跡^(覺想)・軼法輪三條^(公賴)・正親町黃門等對座、与竹

內門跡中将基參合了、當時恐以不落二、但無其益之能芸也、

向^(公)廣亞對面、越前國阿波賀社神主神祇大祐定澄息、一級一官申入了、

廿八日、今日件官位到來、先年彼定澄予申沙汰之、今又同前、為予末流

氏族之上者、不能左右者也、

上卿^(山内實朝)
藤中納言
天文十四年七月廿六日 宣旨

從五位下卜部定富 卜部定富^(此分相違也、此外同前也)

宜任大炊助 宜叙從五位下

藏人左中弁兼近江權介藤原國光^(広德奉) (7才)

八月大

一日、辛卯、晴、吉田社新米供申了、

三日、癸巳、雨下、今日於 禁中日本紀講釈了、

於小御所有御聽聞、

未刻參 内、^先於外番所各參会、然^二薄^一以緒可參候之旨、被仰出 之、

予從殿上經清涼殿・紫宸殿御後、參^小御所、

從是已前以^(吉世)廣亞被仰出云、先年於儀仗所兼俱卿講說申了、^(今度)可為其

分之処、西方庇被取之、被造御庭、夕陽甚快之間、為小御所之旨仰

云、

甘露寺亞相^{伊長} 三條西亞相^{實世} 廣橋亞相^{兼秀} 高倉黃門^{水家}

正親町黃門^(季通) 山科黃門^{言繼} 四辻黃門^公 白川二位^{雅業} (7ウ)

中御門右大弁宰相^{宣治} 廣橋右中弁^{國光} 薄^(以緒)

冷泉^(為基) 高倉右衛門佐^(永) 極藤^(氏直) 等也、

御簾之内竹園御參^{云々}、題号申入了之、

此後於小御所被出御益了、任位次了、及數反、

六日、丙申、日本紀講釈了、聽衆・祇候衆如三日、此内高倉宰相^(範久祇)

候^{云々}、神代上成此純男矣、至此段申入了、此已前以^(廣亞)被仰出云、

神道一座可有御伝受、然者來十三日可有御相伝^{云々}、以^(彼存之)旨申入了、

今夜青蓮院門跡一宿了、

八日、己亥、廣橋重遣状了、其段神道御伝授以壇可為御修行敷、^(以)御

机可為御行敷、可覺悟之旨申遣之処、返状如此、

芳札本望候、來十三日御伝授事、以壇可為御行之由候、其分御調專

一候、御道具等可為御持參候、次御在国事、(8才)尚以面可申談候、

聊取乱事候条、閣筆候也、謹言、

即刻 兼秀

十日、今日日本紀講釈申了、如先日、

十三日、巳刻參 内、先於儀仗^(定)所有御伝授、申次薄^一、^(以緒也)行事初

政伝授了、^(次第有別紙)

壇八角壇^二八宮太元許置之、雲盤、王盤、神籬、柱鈴^二、其陸^二無之、

脇机^二灑水、打鳴、岐神^二、太麻置之、出御之時、予先平伏了、其比

可近御玉体之旨、有御気色、即令膝行候以前、此後伝授申了、

後土御門院御伝授者、切紙大事許也、今度壇上之重位御伝授^{云々}、

近年無之、予当于時服、御師(8ウ)範圍目之至也、

此後講釈申了、

十四日、日本紀講釈申了、此已前於番衆所各參会、三西亞雜談了、彼云、

三十^(歳)内講釈諸儒無之、面目之由被申了、

以^(廣亞)被仰出云、十六日必々可祇候、先御伝授事、重可有御不審、又

印形和抄可調進入之旨、被仰出了、畏存之旨言上了、

十五日、細谷与五郎^(幹文)常陸国人也、自夏被來、予加扶助了、神道流

兵方者也、予今日極太刀之奧義了、

自土御門有春鎮守神体雖申候、無之事候間、神鎮札所望之旨申來間、
調遣了、
(9才)

十六日、於儀仗所先日分重伝授申入了、種々有仰之儀、後嵯峨院兼直

御伝授之旨可遊置、又兼熙朝臣後円融院、後小松院御伝授之旨被遊置

之旨仰云々、又今度相伝申入候次第、印形御即位・御灌頂不相違之旨

仰云々、瓊予印ハ路次事取詰之、御印明之旨仰云々、此外防州之事等御

尋云々、

十八日、今日雖可有御講釈、越州下向之旨依御暇申入、御延引云々、

十九日、自根來寺日太貴曾大明神上葺也、鎮札所望之間、遣之了、一

貫二百文到來了、又先日正遷宮日取十二月所望之旨申之間、調遣了、

正遷宮吉時

■月十二月八日丁酉 時戌

天文十四年八月十九日 神道長上(花押)

大内大貳三位返狀如此、以宗仙尊札拜見仕候、其後依無の便不申入候、非懈怠候、

一伊六事、已後無下向之様二以內々大佐三へ可申之旨仰候、依何子細如

此被仰候ハ不存由申候、此処仰事候間只是又急度以面向非可仰入

之儀候、内々ノ御事由申計候、此外之儀者清四総昌へ以目安状

申遣事ハ、於貴国風聞之通、趣於或所茶湯之会參会之御、雜談之折節申事候、会尺二テ大佐兼右へ語申

候処三、又彼人武へ御物語ノ次二只何トナリ可申入事候、切子談之詞

云、陶中書被下御字事、忝之由有其沙汰云々、大佐云、此段為上意非

被下之、自国依望申被下御字了、然処三至于今不被付御字之段、義

何哉、兼右云、於国者望申之段、無其沙汰候、所詮者無益之旨同定

被仰候トハカリ申事候、自余之(10才)儀ハ無之候、殊此段一往

ニテ落着候、於于今者無其沙汰候、

一築山社々職事、永 宣旨、申談広橋殿相調申候、去年可定其人

上者、其已前可然之旨、彼御異見候間、其分二宣官 宣相調申候、

一孫子抄事、直解分ニテト可申遣候、當時越州前在国候、

一五德祭事、四季直用二右延三被仰付候旨、可然存候、右延次第ヨリ

伝

授申入候分少も浅略仕候旨、不審存候、兼右書遣候、右延次第可被引

合候、

一護摩御伝授事、以後存候、乍去於貴国各雖伝授候、至觀念相伝候

人無之候、此行法ハ觀念計候、又秘伝次第雖為一人未許可仕候、

云彼云是、先可被待候哉

一八神殿御造立事、尤望二御座候、乍去八祈事、過分(10ウ)之用途

候間、諸国之儀、相調之、各成就候ハ、可申入候、貴国之御事者、

一方可奉頼之覚悟候、

一六願御成就事、聊無疎意候、百万反も呪文修行神呪候、漸二万反

誦候、公武御祈禱事、被仰出候、又百三往々種々無尽之儀、自權

家申懸候、就此義不得隙下、日々出京仕候、祇園大宮司存知仕候、

彼依之不得寸隙候、八百万神照覽、聊以無如在候、涯分可致精誠候、

公武御暇申入之、令參籠可修行仕候心中候、

一去三日ヨリ於 禁中日本紀講釈申入候、五六度參勤仕候、未終上奏候、既來廿一

日ヨリ御千句御座候、依此義御延引候、

一去十三日神道行事初段分御伝授候、中後段有御加行而後、可有御修

行之旨、被仰出候、直 勅定候、印明等少々御即位御灌頂不相違之

旨仰候、宗源(11才)行事御伝授事、後円融院已來無其儀無之、

宸記仲御記二被遊置之旨勅定候、

一近日与風越州罷下候、彼国国之主朝倉息男首服仕候、為彼礼可罷下

候由、從国被官人申上候間、与風罷下候、來月末辺必々可罷上候、

一、河内辺事、家督之儀未定候、(高山種長)故尾州如遺言者、能州守護息男候、依

之當時其扱候、(同義條)然然^二不慮^二能州守護匠作入道死去之間、菟角打

過申候、多分可為此人之旨、其沙汰候、(木脱)佐々霜台之扱候、但於河州・

尾州、舍弟衆各其覚悟之由申候、多分可及鬪乱之旨、京中上下其沙

汰候、恐惶謹言、

八月十九日

兼右

大内殿

(11ウ)

廿一日 從防州一忍軒同答、

一、猪油為付薬用事有之、凡六畜鹿猪ノ忌ハ何モ服用ノ事也、身外^二用具、

或膠、或角等不忌之、服用ハ忌之、

答云、無相違、

一、牛馬事、既有死穢服用、空無穢乎、假令日本人倫不食之間、服紀令等

二、不載之、若食者必有穢歟、

答云、可有穢、於日本不食之、仍無其沙汰、

然^二膠身外^二用具不忌之、冠石帶其外神事具用之謂、猪油可准之歟、

答云、可准之、

大内大貳三位^{義隆}築山社々職、永可被補此職之旨、官宣所望之間、与

広橋重相申談之、遣之了、

築山大明神社職事、永可被定此職旨、官宣申調候、珍重存候、去

年被任彼職候キ、其已前可然之(12才)由、被仰広橋殿承候条、其分日

付候、官務留守中彼職事、与奪持堅候間、与彼申談候、恐惶謹言、

八月十九日

兼右

大内殿

周防国築山社

左中弁藤原朝臣国光伝 宣、

權大納言藤原朝臣兼秀 宣奉

勅件社宜令置禰宜・祝・俗別当等職

者、

天文十三年壬十一月一日修理東大寺大仏長官左史小槻宿禰伊治^奉

陰陽行義、祇園大宮司時重、彼息兩人令執行度(12ウ)之旨、令執心

之条、令裁許了、於伝授者、維清軒紹惠方へ申遣了、奥書云、

陰陽行儀者、神道之初行也、三十六日致加行、而後修法之、今度祇

園大宮司橋時重、別而勵執心之条、伝嫡男右兵衛尉貞次了、於面授

相承者、可相伝予之門弟子也、

天文十四年八月日

神道長上下部(花押)

今一人者隼人佑長信也、

布齋服事、許用右兵衛尉貞次了、可用神前者也、(13才)

天文十四年八月日

神道長上下部(花押)

廿六日 自江州下笠信乃守、住吉社造作法尋来之、大工来之間、当社

如八神殿可修造之旨、申含了、又住吉社鎮神札所望之、被遣之了、

当月者廿三日御千句第十 御製

何人

月に菊新綿かさすまかき哉 仍覺

あた、め酒もすさましき雲 称名院殿

朝床のねやのうつみ火冬まちて 三条大納言実世

廿九日 為越州為下向発足了、至坂本下着了、

晦日 今日令乗船、着片^{カタ}太保了、

(13才)

九月

一日 二日 三日 依風雨未片太保逗留了、

三日、着打下郷了、(又四) 四日、到海津了、(又五)

五日、到越州新保郷了、(又六) 七日、到越府中了、

七日、及昏下着一乗谷了、即以朝倉備前守可申処、明日凶日也、九日可

見参之旨被申了、

八日、阿波野神主息男定富被召具、来礼、太刀百疋来了、(14才)

於朝倉霜台兩度神道修行了、一度八行事護摩、北斗祭由、一度八太元

延寿行事護摩也、

從越州上候砌、向江州北郡浅井新九郎館了、連々依無等閑也、兩日逗留了、上之砌、八幡宮江州北郡寺家滞留了、寺家衆悉為礼来了、此内密教房卜

号法師神供身皆貴祓并。祝戸伝了、

(14ウ)

十二月

一日、去々月廿八日、曇花院殿大智院殿御息女 惠林院殿御姉 御他界、至来二日天下

觸穢之条、神事無之、

三日、齋場并社頭神供備進了、

以広橋垂相兼秀 依仰参 内了、已前御伝授之条々重被尋下之、又御加

行十八日也、今十八日有御修行、而後重位可有御伝授之旨、勅定

云々、此外条々 勅定有数多、神違之外不可有其感応之旨仰云々、

五日、民部少輔俱忠 差下防州了、大内大貳為礼也、方々如形令音信了、

及八十余ヶ所了、

十三日、参慈照寺近衛前関白 御舎兄、此比家門之近所御逗留云々、参彼旅店了、

然処二於 家門源氏御講积在之、右京兆(細川昭元) (15才) 發起被申云々、内々

家門へ申入之、可相候之旨、從院主被申条、参 家門了、有御当座、

探題、

寄木恋

うそにのみみてなけ、とや木々のゑよりあはぬ人の面影

おもいやれかく身にあまる袖の上をさすか岩木の心なりとも(15ウ)

(16才白紙)

天文十五年記

正月

元日、神事已下如常、

二月

五日、武家御祓表囊、仰兼和令書之了、於表囊者雖為幼少書之旧例也、

自大内大貳問状返答如此、

(以下欠)

(16ウ)